博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　川上茂信　印

学位申請者　土肥 篤

論　文　名　La particella *pa* nelle varietà del ladino dolomitico con particolare attenzione al fassano
（ドロミテ・ラディン語とくにファッサ方言における小辞 pa）

＜審査結果＞

審査委員会は、主査に川上茂信（スペイン語学）、副査として川口裕司（フランス語学）、上野貴史（イタリア語学・生成文法）、富盛伸夫（言語学・ロマンス語学）、黒澤直俊（ポルトガル語学）の5名と審査協力者として山本真司（イタリア語学・フリウリ語学）を加え構成され、それぞれ専門の見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で2020年5月31日に公開の最終試験を行った。その後、論文および最終試験の内容について協議を行った結果、本論文は、本学大学院が学位授与のために定めた基準を十分に満たしているだけでなく、優れた高い学術性を示していることが確認され、よって審査委員会は全員一致で、土肥篤氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

＜論文概要＞

本論文はドロミテ・ラディン語に現れる小辞 pa を対象に統語・意味・語用論の観点から、その性質を明らかにすることを目指したもので、類似した機能を有するドイツ語の心態詞の研究を手掛かりに、イタリア北部諸方言、ドロミテ・ラディン語諸方言と射程となる対象言語を絞りながら、これらの類似した小辞を詳細に検討し、かつ Rizzi (1997) による、いわゆる分離 CP 仮説を理論的枠組みとして、小辞の潜在的な移動先を文の最上位構造である左方周縁部の ForceP に想定し、しかし従来の理論とは異なり、指定部ではなく主要部に merge することによって最大投射するという仮説を立てている。土肥氏の研究の評価すべき点は、先行研究の検討も含めて周辺諸方言における用例の検討や理論的考察を行い、そのそれぞれの考察において常にオリジナルなデータや仮説を少しずつ付け加えていることにあるが、圧巻は、ラディン語通時コーパスの詳細な検討と、論文が主たる対象としたファッサ方言でのフィールド調査をもとに、この方言

の小辞 pa は心態詞のモダリティーに関わる意味機能を失っているにもかかわらず文法化もされていないという段階にあることを実証かつ理論化したことである。

ドロミテ・ラディン語の五つある方言のうちトレント県で話されるファッサ方言が主たる対象となっている理由は、この小辞が北イタリアで広く用いられるものの、その疑問文における用法は方言によって大きく異なり、ドロミテ・ラディン語内部でも、この語の機能が話し手の心的態度を表す要素（アンペッツォ方言）から疑問文における義務的マーカー（ガルデーナ方言）まで多岐に渡るが、ファッサ方言では小辞が疑問文において頻繁に使われるにも関わらず、義務的でなく、さらに現れた場合でも何かしらのニュアンスを付け加えることもないという特殊な用法が見られるからである。そこで論文では、ファッサ方言における小辞 pa について、ドロミテ・ラディン語を含む北イタリア諸方言や、ドイツ語の心態詞研究まで対象を広げ、比較対照的な観点から考察している。これは pa が多くの言語で心態詞として使われることと、ファッサ方言を含む特殊な用法が文法化と深く関わっていて、ドロミテ・ラディン語の全ての方言で心態詞として用いられていた時期がかつて存在したことが推定されるからである。

本論文は序論、結論と以下の５つの章から成っている。

1. Le particelle modali（心態詞）

心態詞の研究が進んでいるドイツ語における成果をもとに、その一般的な特徴を扱っている。これらの特徴はさらにイタリア語における心態詞に応用され、以降の章における分析の基礎を提示している。特に心態詞の統語的特徴についてモダリティに関わる機能と文の統語構造が持つ関わりを捉えるため、Rizzi (1997) による、いわゆる分離 CP 仮説が理論的枠組みとして採用されている。

2. Le particelle modali in alcune varietà alpine （アルプス地域で話される諸言語における心態詞）

前章の心態詞一般に関する研究をイタリアで話される方言・地域語に現れる語に適用して分析している。具体的にはヴェネト州およびトレンティーノ=アルト・アディジェ州のうちトレント県で話されるヴェネト方言を対象に、イタリア語にみられる心態詞の地域による差異と各方言に特有の心態詞が扱われる。さらに、南ドイツのバイエルン方言に現れる心態詞 denn とその文法化についても対象とされている。

この章では談話辞は文中で現れる位置によって三種類、すなわち文頭・文中・文末に分けられている。特に、分離 CP の枠組みにおいて、文頭位置と文中位置の境界が「発話力」（Force）と呼ばれて文タイプおよび発語内行為に関わる情報を担うとされる位置とそれより上の間にあることを示した上で、文中位置に現れる心態詞が成立する文法化のプロセスが二つの種類に分けられるのに対し、文頭位置で起こり得るのは比較的単純なものの一種に限られることが指摘されている。

3. Le particelle modali nel ladino dolomitico（ドロミテ・ラディン語における心態詞）

ドロミテ・ラディン語における pa およびその他の心態詞が扱われる。具体的には、第 1 章および第 2 章において得られた結果がドロミテ・ラディン語に適用されて

いる。この章においては、特に pa の疑問文におけるバラエティに富む用法が各方言について詳細に記述されている。先行研究（Hack 2011, 2014）が指摘する通り、これらの用法は pa が時を表す副詞から心態詞へと変化し、さらに疑問文のマーカーへと変化する文法化プロセスの存在を示唆している。

また、pa が心態詞としてではなく文法上の機能を持って現れる文は全て定動詞が文の中で高い位置へ移動する文であるという観察から、文法化の結果として pa が第 2 章で特定した文中のうち最も高い位置に直接現れる要素へと変化していることが指摘されている。さらに、いわゆる V2 語順を持つガルデーナ方言およびバディーア方言でのみ同様の変化が平叙文でも起こっていることから、この特徴が最初は疑問文において現れたのち、同じく定動詞が移動する平叙文および命令文にも広がった可能性があることが示されている。

4. La grammaticalizzazione della particella *pa* nel ladino dolomitico （ドロミテ・ラディン語における小辞 pa の文法化）

前章で記述した現代における pa の用法をもとに、通時的な観点からその変化を扱った。先行研究によって提示された文法化モデルを検証するため、オンライン通時コーパス Corpus dl Ladin Leterar を用い、ガルデーナ方言・バディーア方言・ファッサ方言について、1800 年から 1999 年までの全ての疑問文を収集し、pa の使用頻度および用いられるコンテクストが比較されている。

分析の結果、先行研究によるモデルは小辞が最も文法的な用法を持つガルデーナ方言においてはその有効性がはっきりと認められる一方で、他の方言については一部しか当てはまらないことが指摘される。これによって、先行研究による分析がドロミテ・ラディン語方言全てについて統一的な文法化を想定しているのに対し、各方言に対してその方言特有のファクターを考慮した異なるプロセスを考える必要があることが示された。

5. La particella *pa* nel ladino fassano （フアッサ方言における小辞 pa）

この章においてはファッサ方言における pa の用法を下位方言のレベルまで掘り下げて詳細に記述し、分析した。上述の通り、この方言は pa が心態詞のモダリテイに関わる意味機能をすでに失っているにも関わらず文法マーカーになっていない、いわば過渡期にある方言とされている。それにも関わらず、前章における通時データの調査では、少なくとも 18 世紀から現在に至るまでファッサ方言における pa の用法には変化がないことがわかった。そこでこの現象をよりよく理解するため、二度の現地調査を各下位方言について実施してデータの収集が行われた。

見かけ上の意味を持たず、義務的でもない pa の用法は Beninca & Damonte (2009) の人称代名詞に関する研究における仮説を援用し、疑問文マーカーである pa が音声を持って実現しない要素と自由に交替する現象として解釈される。さらに、ファッサ方言における疑問文の作り方には小辞 pa の文法化のほかに 1980 年頃に起こった疑問文の統語構造の変化、および近年におけるファッサ方言の標準化を前提にした学校でのラディン語教育が影響を与えていることが指摘されている。

本論文では、時間を表す副詞であった小辞 pa が語彙的な意味を失って語用論上の意味を獲得することで心態詞となり、さらにその語用論上の意味を失って純粋に文法的な機能を得て文法マーカーになる文法化の過程を、ドロミテ・ラディン語のうちガルデーナ方言、バディーア方言、ファッサ方言について記述した。特にファッサ方言については、その下位方言についても詳細な検討が行なわれている。この文法化はある要素が文の統語構造において最上位に位置する領域との関わり方を変化させていく過程であると言える。これは、この領域（Force）が文タイプおよび発語内行為に関わる情報を担う場所であることによる。したがって、本論文における統語論の観点による分析は文の左縁部の研究の中に位置付けられ、談話が統語構造の中にどのように反映されるかについての議論に新たなデータをもって貢献するものである。

一方で、ドロミテ・ラディン語についての研究としてみたとき、pa という要素が各方言だけでなく各下位方言において異なる用法と歴史を持っていることが示されているが、特にファッサの谷の内部における疑問文のバリエーションは、この言語を特徴づける歴史的な規範化の乏しさと近年における標準化の試みの対立がはっきりとみて取れるケース・スタディである。同時に、少数言語であり、極めて一様な特徴を持つマイクロ・バリエーションとしてのドロミテ・ラディン語において特異なほどバラエティに富む小辞 pa の研究は、この言語における研究が持つことのできる深みを示していると言える。

＜審査概要および評価＞

審査委員会は、特に次の点を高く評価した。

1. 研究の主たる対象であるドロミテ・ラディン語のファッサ方言を中心として同言語の他の諸方言、さらに地域的に連関するヴェネト方言など北イタリア北部諸方言全体まで射程を広げているという、類型地理論的な背景を踏まえた研究の広がりと深さ。
2. 類似した機能を有するドイツ語の心態詞研究について十分な考察を行なっている。研究テーマに必要な幅広い先行研究が踏まえられていること。
3. 主に Rizzi (1997) による、いわゆる分離 CP 仮説を理論的枠組みとして考察を展開しているが、近年の理論言語学の成果を十分消化し、発展的に生かしていること。
4. 通時コーパスが持つ本来的な不十分性や限界を十分自覚しながらも、ラディン語通時コーパスを最大限に活用し、詳細な検討を行っていること。
5. トレント大学での地道な研鑽に踏まえ、ファッサ方言でのフィールド調査を遂行し、小辞の pa について、興味深いデータをまとめていること。
6. 研究を遂行するにあたり、ドロミテ・ラディン語研究者として、さらにイタリア語研究者としての自覚に加えて、生成文法論者としての観点が非常に理想的な形で

融合していて、将来的に研究者としての発展が見込まれること。

論文はイタリア語で書かれているが、文章は十分に推敲されていて読みやすく、誤植等の単純ミスもほとんどなく、極めて完成度の高い論文であった。公開審査の場では、土肥氏は委員の様々な質問や批判に明確に答え、論文の限界や問題点についても十分に自覚し、今後の研究の発展が期待される。

以上のことから、審査委員会は最終的に審議をした結果、本論文は博士（学術）の学位を与えるにふさわしい学術的成果であると判断し、土肥篤氏の今後のさらなる研鑽に期待するという認識で一致した。